聞き上手・話し上手

扇谷正造

聞き上手・話し上手
昭和五四年三月二〇日第一刷発行　昭和五八年一二月一〇日第一三刷発行
定価——四五〇円
著者——扇谷正造
©Shozo Ogiya 1979 Printed in Japan
発行者——加藤勝久　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二　電話〇三—九四五—一一一一　振替東京八—三九三〇
装幀者——杉浦康平＋海保透
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
ISBN 4-06-145535-4(2)
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。（学1）

扇谷正造

聞き上手・話し上手

市民のための講座

講談社現代新書

序に代えて

いつか、こういう本をまとめてみたいと思っていた。理由は、三つである。

第一に、私は、この本でも述べているように、若いころはドモリ、早口、ずうずう弁と三拍子そろった話し下手であった。それは、ずいぶんと辛い事であった。昭和十三年秋、私は中支へ従軍記者として派遣された。

当時、日本と中国との間には、不幸な戦争がはじまっていた。私は東京師団に配属され、漢口の陥落とともに帰社を命ぜられ、日比谷の蚕糸会館で従軍報告を行なうことになった。硝煙の匂いもなまなましく演壇に立った私は、満場をうずめつくした聴衆を前にして、すっかり立ちすくんでしまった。私はキレギレに、

「いま、こうしている瞬間でも、兵隊さんは戦っているのです」

とか、

「慰問袋を送って下さい」

とか、

「慰問品には森永の煮アズキが、いちばん喜ばれます」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

などと口走った。弥次が八方から飛んだ。従軍報告というのは、士気高揚のため、勇壮な物語りをするのが通例なのに、これはいったい何たることか！　というわけだった。翌日の新聞内報には「朝日新聞の醜態、扇谷特派員、立往生！」という大見出しとともにデカデカと報道された。

スピーチだけではない。一対一の会話でも、私はよく〝一行とばしてモノをいう〟といわれた。早口なので相手には、私の話がよく聞きとれないらしいのである。

――その私が、このごろは各地の講演会に呼ばれたり、テーブルスピーチは名手でないまでも、上手な方とされている。そこまで来るには、私は、私なりにずいぶんと努力もし研究もしてきた。その体験を、いつか系統だって、まとめてみたいと思っていた。

世の中には、好話材をもちながら、話し下手をなげいている人が多い。それらの人々に、この本が、すこしでもお役に立てば、という願いである。これが第一。

第二は、きき方についての再検討あるいは再評価ということである。人は生まれるとすぐに、生存の必要上、「きき」かつ「話」をしてきている。日常の生活は、それでほぼ用が足りている。そこから人は「きき」かつ「話す」ことが、ごくごくあたりまえのことと思っている。実は、その〝あたりまえ〟というのがクセモノなのである。とくに「きく」ということである。学校では「読み」「書き」、そしてこのごろ「話す」ことも学習されている。だが、「き

き方」については、まさに野放し同様である。

最近は、各国がこの「きく」ということに科学的なメスをいれはじめてきた。その一つが、まず hear と listen to とのちがいである。hear は、ぼんやりしていても耳に聞えてくる。listen to は、注意して相手の話に耳を傾けるということである。

この二つを日本語で書き分けると、hear は「聞く」であり、listen to は「聴く」ということになるかも知れない。そして、人と会いその話をきいて、自分の精神生活の糧となるのは「聴く」(listen to) の方である。

「聴く」ことのメリットを別の面から考えてみよう。アメリカのある統計によると、通常の市民の、その生活時間の中でのことばに関する時間の配分を調べてみると、「きく」五〇パーセント、「話す」三〇パーセント、「読む」一五パーセント、「書く」五パーセントぐらいだという。とすれば、聞き上手か聞き下手かということは、生涯において、はかり知れないちがいを生ずるであろう。生涯教育ということが近年しきりに叫ばれているが、聞き上手こそは、そのための決め手ということができるかも知れない。

メリットはそれだけではない。聞き上手の人は概して話し上手である。昔からよく「見巧者(みごう)なくして名優なく、聞き上手なくして話し上手なし」ということがいわれている。それは、見巧者、聞き上手が名優、名スピーカーを育てる母体だという意味だが、実はその真の意味は、

見巧者、聞き上手の人自身が芸達者あるいは話し上手なのである。相手のやり方やいい方を注意深く、見かつ聞くからこそ、その対応は素早くかつ簡潔明快である。つまり、きわめて機能的に応答できるのである。そして、この機能的ということは、現代人の一つの資格であり、それも詮じつめると、注意して見、かつ考えながら聞く習慣から生まれてくる。

第三は、私はこの本で一つの実験を試みた。それは〝ハウトゥもの〟の読み物化ということである。〝ハウトゥもの〟というと、人はよく無味乾燥な技術書を考えがちである。事実、多くの本はそのように書かれている。ジャーナリストとしての私は、多年、いつかこれを打破してみたいと思っていた。エピソードをふんだんに盛ったのは、いわば、ハウトゥものに対する味つけである。と同時に一つの how to（技術）には、いつも why（なぜ）をつけ加えた。人は心に納得して、はじめて技術を習得しようと心掛けるものなのである。それがはたして成功しているかどうかは、皆さんのご判断に待つ。

最後にサブタイトルを「市民のための講座」とした。思いあがって、そうしたのではなく、この本の執筆中、いつも、私の頭にあったのは、オープン・ユニバーシティ（公開大学）ということであった。この世の中には、さまざまな人生上の運命から、上級学校へ進む能力がありながら、行けなかった人が多い。それらの人々のために、すこしでも〝知的な技術書〟ということが、この名前を選ばせた。人生は何びとにとっても校舎のない、それぞれの人々の〝私の大

学〃なのである。

本書ができあがるまで、終始、私をはげましそして協力してくだすった講談社の天野敬子さんおよび田代忠之氏には、この機会に、記してあつくお礼を申しあげたい。

昭和五十三年秋
武蔵野の一隅にて

扇谷正造

目次

序に代えて――3

第一部　聞き上手――13

1　「ああ、これが〝私の大学〟」　14
《生涯教育への道しるべ》
「ジョハリの窓」／一枚の銀貨の裏と表／哲学者アランの設問／デベンズという解決法／「ああ、〝私の大学〟」

2　聞き上手の民主主義　29
《フランクリンの罫線表》
X市の演説会荒し／すぐれた聞き手、実は？／人は聞き手を待っている／最高のお世辞は聞き上手／相手の関心に焦点を／フランクリンの罫線表／

よく啓発された世論

3

自己啓発としての聞き上手　45
《五〇パーセントを占める「きく」時間》
哲学的保険セールスマン／「目の教育」から「耳の教育」へ／火星人来襲／生活時間の中の五〇パーセント／「治己知彼応変」／東大卒業生のメリットは？

4

軽いおどろきの表情で　62
《上手なあいづちの打ち方》
三ホメ戦術／目と目／会議と怪議／軽いおどろきの表情を

5

キドニタテカケセシ衣食住　78
《話のつぎ穂ということ》
ピンポンと会話／キッカケにはまず名前／対人関係の潤滑油＝Y談／つぎ穂のトガメ／あるセールス話法二つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

6 メモ、メモそしてメモ 95
《電話の傍には紙と鉛筆を》
選択のスクリーン／準備＝問題意識ということ／『廃帝カイゼルに会わざる記』／J・ガンサーの25問／エッセイは人柄を表わす／ある実験

第二部 話し上手 111

1 「わが良友と思え」 112
《この次あった時、笑顔で…》
うしろ姿のインタビュー／「サヨナラ」ダケガ人生ダ／ギブ・アンド・テーク／話の小銭

2 もっと〝小銭〟を 128
《魅力ある話し手の条件》
アテテ・ゴランセ／ハイドンの『さよなら交響曲』／河本敏夫という男／ツェッペリン号の教訓

3 ドモリ早口ずうずう弁　144
《私は、いかに矯正したか》
あるハプニング／ヤ行のドモリ／「サッパリ、ワカラン」／野村万蔵氏の秘伝／方言とステータス・シンボル／美しい方言

4 〝マ〟ということ　159
《夢声話術の秘密》
『花婿の寝言』／ことばの休止と気合／二つの講演会／「モウはマダなり、マダはモウなり」

5 スピーチの心得　175
《2S1Wということ》
短ければ短いほどいい／一分間に三百字／ウィッティということ／アガるのはあなただけではない／チャップリン・システム

6 コトバは心の使い　190
《美しい日本語とは》

ニューヨークで／スイスの山村で／東ベルリンのバスの中で／ショシャナンが散った／松戸市の場合／丸い卵も切りよで四角／ありがとうが第一位

第三部　ある対談――207

『昨日と明日の間』＝井上靖氏との対談　208

文学への洗礼／こどもの目／昭和の詠み人知らず／万葉の歌／砂漠の中の都市／自然に恵まれる日本／アフガニスタンの遊牧民／生きていくしあわせ

参考文献　235

第一部　聞き上手

1 「ああ、これが〝私の大学〟」

《生涯教育への道しるべ》

真理を探るためには
ふたりが必要だ
ひとりは話すために
ひとりは聞くために

——ソロー

「ジョハリの窓」

もう、かれこれ十年前のことになる。私が朝日新聞を定年退社したのは、昭和四十三年三月である。社では、その前後に辞めた十人ばかりの同僚のために小宴を張ってくれた。O君もその一人であった。彼は慶応の仏文を出て、長く出版局につとめ、定年直前は企画部にいた。

食事がすんだあと、一人一人、立ちあがって、ささやかな感想を述べた。それらは、それぞれに実感のこもった。いいスピーチだった。しかし、その中でO君のスピーチは、ずば抜けて光っており、まるで真珠のような輝きを放っていた。私は、心の中でアッとおどろいた。スピ

ーチは、こういう内容であった。

「……私は、社のご好意で、あと二年、嘱託としておつとめすることになりました。定年前の三年間は、企画部で、社のいろいろな催しを担当してきました。それらの中には幾人かの世界的な演奏家がおりました。お供して各地をまわる。演奏が終ると、きまってアンコールの拍手が湧く。すると、この人たちは、それに応えて、舞台に出る。そして、きまって小曲をやる。それは、これまで何百回あるいは何千回くりかえしてきたか知れない曲である。それだけに楽楽とひきこなし、聴衆を魅了し、まことに見事なものでした。

私も三十何年か本番のおつとめを果たし、あと二年、アンコールにおこたえするわけでありますが、出来得れば、これらの名演奏家のように、小曲を自在に心ゆくまで楽しみながら演奏したいと思っております」

スピーチは、たとえようもなく粋なものであった。定年者の会合にありがちなジメジメしたところがなく、さらばといって、自分の功をほこる、おごったところもない。さわやかで、しかも、しみじみとしたその内容は、十何人かいた同席者の胸に快くしみた。そして、つくづく反省させられたことは、私は、いかにO君を知ることのすくなかった事か、ということであった。

編集、出版、論説と、私は社内を転々としたが、出版局には、その間、十年余りもいた。私

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com